

私の学問遍歴

—— 恩師・先学・友人

私の父は、父の言葉で言うところ音楽学者であった。大正時代から二十冊を超える音楽書を書いたり、音楽雑誌を編集したりしており、戦後では東京堂から『音楽辞典』を出版して、競争曲、音楽学などという言葉を出していた。父の蔵書は冊数を勘定したことはないが、多分五千冊以上はあったと思う。渋谷にあった二階建ての小さな家の中には、至る所に多量の本が積んであって、寝ても醒めても父の本を眺めて生活していた私は、読書と著述に明け暮れる父を見て、私も読書と著述の生活が自分に相応しい生活だと思い込んでいた。

最初は父の職業を継いで音楽学者になろうと思い、当時父の弟子で武蔵音楽学校の先生をしてもらった小山郁之進先生（後に広島大学教授）にピアノを習ったが、中学四年生の時、第二次世界大戦が激しくなり、何処の音楽学校も閉校になり、その上、文科系の上級学校に行けば徴兵されるという厳しい状況になった。

小 泉 仰

そこで、私は徴兵延期の恩典のあった工科系の横浜高工に入った。私は数学と化学、物理学を頭で考えることは好きであったが、手先は全く不器用この上ない人間であったから、実験には不適應で、入学した途端に私が工科系には不向きな人間だということが判った。おまけに一九四五年になると、敗戦の様相と共に工場へ勤労働員に駆り出され、知的活動の道が全く跡絶え、毎日の B 29 の爆撃を避けながら労働に明け暮れる日々を過ごした。僅かに宿舎に帰って後、一人で聖書、文学書、思想書などを読みふけたのである。

敗戦後、一九四五年十月から学校が再開されたが、六ヶ月も勤労働員された私は、科学についての勉学習慣をすっかり失っていた。この勉学態度を再び習得するためかなり苦勞をしたものである。ちょうど昔の巻き時計のゼンマイが全部巻く前に戻ったように、始めから勉学をし直さなければならなかった。一九四七年四月に卒業してから、

横浜国立大学に昇格した母校の T 助教授研究室の研究助手として一年間勤務し、何とか科学への研究態度を身に付けようとしたが、実験装置を自分の手で工作することを主とした科学実験がどうしても好きになれず、自分の科学不適応症を発見するのみであった。

そんなある日、T さんが横須賀海軍工廠から多量の電気機器類の放出があることを聞き込んできて、私もトラックに乗って何台か電気機器類を学校まで運んだことを覚えている。私は前に世話になっていた T M 教授にも分けたらどうかと思い、T さんの許可を得て、T M 教授にも話して T M 教授と T 助教授と一緒に放出物資を取りに出掛けた。ところが彼らは二人で持ってきた放出物資の配分で喧嘩となり怒鳴り合う始末になったのである。

私が仲介した話で二人の衝突を引き起こしたことに對して、何もできない私自身に對して不信をもつとともに、エゴ丸出しで衝突していた二人の教授にも不信感を募らせた。耐えられなくなった私は、翌年早々研究助手を止め、人間とは何かという根本的な問いを問い詰めたくなった。

当時慶応義塾大学文学部の旧制大学最後の学年の九月入学試験を受けてみた。当時の入学試験は今程難しくなかったのになんか合格し、倫理学専攻に入学した。

その頃の慶応の倫理学専攻にはフッサールやマックス・シェーラーを研究していた橋本孝教授と宮崎友愛教授がおられた。私の指導教授は橋本先生であったが、文学部長や理事をしておられた橋本先生は殆

ど私を指導して下さる余裕が無く、私は主として宮崎先生のお世話を頂いた。私の上級生はおらず下級生もない、同級生が三人だけの小さな専攻であったので、私にはとても良い勉学環境であった。そこでは上記の二人の先生からカントとシェーラーを原典講読という形で学び、また哲学の沢田允茂先生の持っていたカント、デカルトの原典講読に参加した。旧制大学院では上記の先生方の講座を取るとともに、松本正夫先生(カトリック)からマレシャルの『カント哲学を前にしたトミスム(フランス語)』の講読に参加し、また東大から出講された金子武蔵先生の「十九世紀ヨーロッパ精神史」の講義を新鮮な気持ちでお聞きした。

こうしたドイツ哲学乃至ヨーロッパ哲学中心の勉学をしている間に、沢田先生より東大で開かれていたアメリカン・セミナーズと一緒に出席しないかとお誘いを頂き、一九五三年から一九五六年までの四年間、毎夏七月から八月までの五十日間東大とスタンフォード大学共催で開催されたアメリカン・セミナーズに学び、ジョン・ゴーヒン(John Gohen)、フランケン(William K. Frankena)、デヴィッド・デヴィドソン(David Davidson)の四人の先生に分析哲学・言語哲学を学びはじめた。特に一九五四年の夏のフランケン教授の倫理学講義は、私に非常に大きな感銘を与えたので、ミシガン大学で先生の指導を受けたいと願う気持ちが強くなっていった。

ちょうどその頃、一九五四年の夏に丸善で R・M・ヘア教授(Anglican Church 会員)の“Language of Morals”, Oxford University Press,

1952の本を買い求めて読んだところ、これが私には不思議なほどの感銘を与えたのである。分析哲学者の書いた著書は、概ね堅い論理的な文章で、非文学的で情念を全く欠いて読みにくく、実存哲学を *geistvoll* と言うのに対して、分析哲学は良く *geistlos* と言われた。

ヘアの本も確かにこうした分析哲学特有の一般的特徴を持つてはいるが、一方でアリストテレス、ミルに共通する倫理学の基本構造を摘出した本であり、私はこれこそ倫理学を考えるための根拠になると同時に、学問を実践に適用するための重要な指針になると思うようになった。後にこれを私は共訳の形で翻訳出版した。ヘア氏の実践的三段論法は、大前提で目的を設定し、小前提で目的を実現するための手段を秤量し、目的手段関連の状況分析を行い、結論で両前提から手段としての行為乃至規則を決定するというアリストテレスの実践的三段論法を現代化したものである。

一九五〇年代半ばの頃、慶応の倫理学専攻内で、助教授の三雲夏生さん(基督教倫理学)の発議で倫理学の将来を巡る議論を行っていた。その重点は我々が外国の倫理学を学んで祖述するのみではなく、現代日本の状況において我々の新しい倫理学をどのように探求することができるかを考えることであつた。

私は倫理学の基本構造を明らかにするには、二千五百年以上にわたって続けられてきた西洋倫理学史上に現れた探求から学ぶことができることと、さらに明治以来今日に至るまで、日本にそれらが導入されてきているので、西洋倫理学の探求は引き続き行わねばならないこ

と。第二に二十世紀日本の思想的土壌には明治以前の伝統的倫理思想が根底に流れていることから、これら伝統的倫理思想を研究すること。第三に西洋倫理学と日本の伝統的倫理思想が近代日本においてどのように交流してきたかを明らかにすること(第一、第二、第三の課題が私の比較思想の方法による近代日本思想史研究に繋がっている)。第四に二十世紀後半の現代日本の思想状況を研究するためには、文献研究のみならず、社会科学的方法(具体的には社会心理学的方法)を倫理学者も学ばなければならないこと。第五に以上の四つの課題に回答しながら、日本の土壌において独特の倫理学を形成すべきであること、という五つの課題を提案した。

以上の構想をアリストテレスの実践的三段論法の構造で分類すれば、第一と第二と第三の課題は、「我々は何をすべきか」という問題の中で「何を」という目的探求の範疇に入る。第四の課題が現代の状況分析であつて、目的を実現するための手段を選ぶ科学的分析であり、これらの研究は学問的知的課題である。そして実践的には両者から新しい日本の倫理を総合的に創造することができるといふものであつた。課題全体は一人の人間にとって殆ど実現不可能なほど膨大な課題ではあるが、実は私は現在に至るまで、ドン・キホーテのようにこうした課題を追い続けている。

多分一九五八年春のことと思うが、ロックフェラー・ファウンデーションのファーズ(Fairs)氏と早稲田大学で会う機会があり、私は上に述べたようなことを語ったことがある。ファーズ氏は大変興味を持っ

たようで、もし私がアメリカに来ることがあったら、是非自分に連絡をして欲しいと言われた。

一九五九年七月から一九六一年七月の二年間、留学のチャンスに恵まれて、一年目にはミシガン大学哲学部大学院で学んだ。実は橋本教授からはミシガンでは degree などは取らずに、アメリカの学問的雰囲気と文化に親しんで来るようにと示唆されていた。ところが私のアドヴァイザーのフランケナ氏 (Christian Reformed Church 会員) は私に是非 M.A. を取るようにと繰り返し勧めた。旧制大学と旧制大学院出身の私は、アメリカの大学の M.A. など今さら貰ったところで、日本では何の役にも立たないと言って断ったが、彼はあまりにも熱心に私に懇請するので、私は根負けして自分の意志ではなく彼を喜ばせるために M.A. コースを取ることにし、一年目に M.A. (Philosophy) を得たのである。

ミシガン大学哲学部は当時、ウイリアム・フランケナ教授 (William K. Frankena) 、C. L. スチーヴンソン教授 (C. L. Stevenson) 、ウイリアム・オルストン教授 (William Alston) 、シカゴ大学のアラン・ゲワース訪問教授 (Alan Gewirth) 、アラン・カウフマン助教授 (Alan Kaufman) といったアメリカだけでなく、世界的にも有名な錚々たる哲学者が名を連ねていた。私は特にフランケナ氏とゲワース氏の講義に一番興味を持ち、今日においても私に対する二人の学問的影響は大きいと思っている。彼らの基本的哲学的態度はアメリカ特有のプラグマティズムを土台として英国功利主義とドイツのカント主義を調停・総合しよう

とする立場であり、英国の R・M・ハア の思想と極めて近い立場に立っていた。

私は二年目にファーズ氏を通して Rockefeller Foundation Fellowship を貰うことができたので、第四課題の社会心理学的方法の習得を行うのに、ミシガン大学社会学部に移り、社会調査法を学んだ。丁度留学中、突然当時 Ohio State University で研究しておられた I C U のトローヤー (Troyer) 先生から電話を頂いて是非私に会いたいと言われたので、アンアーバーで先生とお会いした。その席で先生はロッキンフェラーから私が社会心理学的方法を学ぼうとしていることを聞いたので、是非日本で一緒に日本の青年の価値意識を研究しようと言われた。私としてもあまりにも突然のことであったが、帰国後一緒に研究いたししようと思案をしたことを覚えている。

私は一九六〇年九月から一九六一年七月まで社会調査研究所の Argus Cambell と Robert Kahn の二人の先生に調査法を学んだ。私のテーマは「日本人の価値意識調査」ということで特にカーン先生には個人教授の指導を受けて五十ページの調査案を作り上げることができた。

アメリカ滞在中に私はアメリカにおける J・S・ミルの功利主義倫理学の影響が大きいことに気づいた。百年前の福沢諭吉、中村敬宇、西周ら明六社社員がミルの書を読んで大きな影響を受け、ミルの思想を前提にして日本の近代化に対して思想的、実践的に大きな貢献をしたことに注目し、彼らのミルへの関心と私のミルへの関心とどのような共通点があるのか、また相違点があるのかに興味を持つようになった

た。こうして私はミル研究とともに、ミルと福沢、西、中村らを含めた近代日本の思想家との比較思想的的研究に実際に踏み込み始めたのである。

ところで私はクリスチアン家庭に育ち、小学校一年生のときから当時は日本基督教会派で現在は日本基督教団に属する中渋谷教会に通い、一九四九年クリスマスのときに故山本茂男先生から洗礼を授かったが、アン・アーバーに滞在中、私は Christian Reformed Church に通った。この教会の牧師は、ハーヴァード大学神学部を卒業しアムステルダム自由大学のティル (Van Til) 教授の下で Th. D. を取ったパーマー (Edwin H. Palmer) 牧師であった。パーマー先生の説教はきわめて熱烈で、私は先生の説教に深く打たれ、彼の清冽な信仰生活と聖書理解とに大きな感銘を受けた。特に日本キリスト教とアメリカ・キリスト教との間の共通性を確認すると共に、同時に私自身の内に潜む日本の風土的伝統思想からの影響によって曲げられた日本基督教の持つ問題性を自覚するようになった。この事から私自身の信仰が果たして真正の信仰なのかどうかを改めて問い直さねばならないと感じ、このために第一に明治の日本のキリスト者たちの信仰・思想を研究したいと思うと同時に、聖書研究を改めて本格的に行わなければならないとしきりに思うようになった。この聖書研究への願いが後の私の旧約聖書研究に繋がった。パーマー先生は後に Philadelphia の確か Westminster Theological Seminary の教授になられたと思う。

一九六一年七月末に帰国してから、多分一九六二年四月頃であると

思うが、私は慶大の教育哲学の村井実先生に招かれ、教育思想乃至倫理思想に関する著作活動に参加させて頂いた。村井先生はプラトンの『国家』についての教育思想に関する研究で博士になられた方で、私は先生と一緒に質疑をしていると、何時も私の今まで考えたことなかったことを私が話していることに気づき、驚くことが屢々であった。私の三十代から四十代に掛けての十年間に亘る先生との質疑と共同研究のお陰で、この頃から福沢諭吉、西周、中村敬宇、西村茂樹などの研究に着手して私の近代日本教育思想史ならびに倫理思想史研究の基礎が築かれたと思う。先生は私にとってのソクラテスである。後に先生はカトリック教会で受洗されている。

一九六五年のことである。デューイ学会において親しくなった同年輩の早稲田大学の峰島旭雄氏が増上寺に新しく創設された三康文化研究所の所員となったので、この研究所で明治思想史研究会を開こうというわけで、最初は峰島氏と私の二人で研究会を始め、後に早稲田大学の小山宙丸氏、亜細亜大学の中里良男氏、芝浦工業大学の伊藤友信氏らが参加され、比較思想史研究会と改称して、比較思想に関する文献を講読し質疑するとともに、共同の著作を発表するという研究活動を続行し今日に及んでいる。

ところで、第四の課題の社会心理学的方法を使用した日本人の価値意識研究については、一年間のミシガン大学社会調査研究所の基礎研究だけでは、まだ不十分であったので、帰国後一九六四年の頃から慶応の社会心理学教授佐野勝男氏から本田・モーターズや野村証券のモ

ラル・サーヴェーに参加しないかという誘いを頂いたので、私は喜んで参加し、確か十年程佐野さんの研究会で社会心理学の方法、特にSCT(文章完成法テスト)の作成、調査、蒐集、集計、分析などのfield workに参加した。この修練があったので、一九七七年から一九七九年までNHK道德番組の望月達也氏の依頼を受けて、佐野氏らの協力を得て放送文化基金の援助で、主査として私は「児童・生徒の価値意識調査」を行い、一人で幾つかのレポートを纏めるとともに、最終的に編著『子供たちから見た世界——家庭、自己、友人、学校』(勁草書房、一九八四年十一月刊)を著した。以上の二十年に亘る社会心理学的方法を適用した現代の子供たちの価値意識調査は、五人の心理学・社会学の若い研究者とともに行ったが、資金を調達し、研究組織を円滑に運営しながら研究活動を行い、時間的にも限られた時間内でいち早く報告するという手順に、私は大変苦勞したことを覚えている。二十年の歳月を費やして結果として充分なものを得られなかったのは、残念なことであったが、すべて私の責任である。しかし社会科学的方法の一端を知ったことは私にとって有益であった。

先述したように私は本格的に聖書研究をしたいという私の心の内奥から迸り出るような衝動に駆られながら、なかなかその機会に恵まれず悶々としていたが、一九六八年の秋、慶応の言語文化研究所の副所長をしておられた松本正夫先生に偶々私の希望を述べたところ、先生には大変共鳴して頂き、当時上智大学に赴任された聖書学の権威 **Walkehorst** 先生を講師にお出で頂き、言語文化研究所の研究活動の一

つとして「ヘブル語による古代文献研究」、後には「ヘブル語、シリア語、ギリシャ語、アラム語による古代文献研究」という、如何にも研究所らしい厳めしい題目で、聖書研究を行った。実際私が一番研究したいと望んでいた『エレミヤ書』研究を行い、今でも続けてきている。最初は一九六九年一月からヘブル語文法を学び始め、次々に古典語を増やして二十八年後の現在では、上記のヘブル語、シリア語、ギリシャ語、アラム語の四つの古典語で『エレミヤ書』を講読し、ヘブル原典と古典語の翻訳の比較研究を行っている。『エレミヤ書』五十二章を一九九六年一月に通読し終わったが、シリア語は九章から始め、アラム語は十五章から始めたので、現在は第一章からくり返して研究している。

最初の参加者は松本正夫先生(カトリック)、牛田徳子氏(慶大言語文化研究所・カトリック)、湯川武氏(慶応大学・カトリック)に私であった。この会にはその後会員の出入りがあり、現在は片桐典子氏(プロテスタント)、多井一雄氏(武蔵工業大学・プロテスタント)、大住雄一氏(東京神学大学)、小峰牧師(前橋教会)と私の五名が参加して今日に及んでいる。二十八年間に及ぶ聖書の原典研究を通して、私自身は聖書と教会に強く惹きつけられ、僅かながらではあるが、内村鑑三の言った「神の機械」になっていく自己を自覚している。この会は私にとって素晴らしい恩寵である。この恩寵へのささやかな感謝の印として、私は自分が属している日本基督教団中渋谷教会において「ギリシャ語で新約聖書を読む会(月二回礼拝前一時間)」と「ヘブル語で旧約聖書

を読む会(月一回金曜日夜二時間)」を担当させて頂いている。

一九七六年二月のこと、実践女子大学の新田大作先生から電話で中国とヨーロッパ・アメリカとの思想の交流・交渉の研究会を開きたいが、私にも参加してほしいという依頼があった。日本と欧米の交流ならお引き受け出来るが、中国と欧米との関係は専門外であるとお断りしたところ、日本と欧米の交流関係でよいからとのことであったので承知した。この研究会は科学研究費を頂いて「哲学交渉史研究会(私の命名)」という名称で、私の担当は西周研究である。その後十年間に亘って月一回研究会を続け、その研究成果を『中国思想研究論集』(雄山閣、一九八六年二月刊)としてまとめたのである。ここでは中国学者新田先生という温和でありながら一筋の強い信念に貫かれた人格者に接して、大きな影響を受け、また会員の福井文雅氏(早稲田大学)、清水多吉氏(立正大学)らという専門は違いますが優れた学者と交際することができた。

上記の研究会が始まった一九七六年二月の頃、大槻春彦先生を中心とする日本イギリス哲学会を創設しようという運動が始まり、私もその創立委員の一人として参加することになった。この会は正式には一九七六年六月五日に創立された。この会はイギリス思想に関心を持つ政治学、経済学、哲学、倫理学、宗教思想に関心をいだく人々が集まって創立した学会である。大槻先生はロック、ヒュームなどを専門にした研究者であり、まことにうらかな春を予想させるおおらかな人柄の先生であった。またこの学会の会員もジェントルマンが多く、

私はこれらの会員との交わりを楽しむために積極的に参加した。ここで私にとってまだ未知の領域であった政治学、経済学、社会思想などの研究者から多くのものを学ぶことができた。武田清子氏、杉原四郎氏、田中庄司氏、田村秀夫氏、田中浩氏、藤原保信氏、平野耿氏、杖下隆英氏、泉谷周三郎氏、など多くのすぐれた学者との交流は、私にとって貴重な体験であった。

武田(長清子先生並びに源了圓先生のお誘いもあって、三十三年勤めてきた慶応義塾を選挙定年制度で一年早く退職して、一九九一年四月から六年間、国際基督教大学で教鞭を取るようになった。ここでは私の聖書研究と教会生活を前提として、比較思想の視点から近代日本思想史、近代日本宗教思想史、近代日本教育思想史などを中心に講義してきた。特にICUで教え始めてから、私は武田清子先生、源了圓先生のご厚情を与えられ、直接・間接にご指導を頂いたことも感謝に耐えない。

ICUはさすがに国際という形容詞の付く大学だけあって、六年間の間に私は英国で一回、日本で一回、国際会議に参加して発表する機会があり、また中国への出張も三回あって、その内、一回は四ヶ月半の出張講義をする経験をし、多くの外国の研究者たちと質疑する機会を与えられ、大変刺激的な経験をすることができた。実はICU退職後の一九九七年十月にも早稲田大学で国際会議を開催するので、現在この準備委員になっている。私はICUに来て、多少は国際的になったように、この点でもICUに深く感謝している。

大学教師を勤めてから三十九年に亘り、平凡な一研究者として私は、自分の出会ったあらゆる研究課題に興味を持ち続けることを許され、自分の好きなように歩むことを許されてきた。この自分の研究生活を振り返ってみると、私は大変恵まれていたと考えるを得ない。その一は多くの優れた研究者たちと交流することができて、彼らに取り囲まれた環境の中で研究することができたこと、さらにこうした多くの恩師、先学、友人から不思議なほど多くの学問的・人格的な恩恵を与えられてきたことである。私はこれらの背後に見えざるところから神が私のためにみそなわしておられると考えるを得ないのである。

終わりに私のような平凡な研究者のために古希記念論文集の編集の労を取って頂いた前アジア文化研究所長魚住昌良先生、現アジア文化研究所長ウィリアム・ステイール先生、並びに本論集に執筆の労を取って下さった諸先生方に心から感謝の意を表したいと思う。